

## 短編小説 三

土師 猛

「誰も解かってくれない」

私は、自動車のセールスマンである。今朝も出勤早々レッカー車が、血の付いた事故車を何台も整備場に運んでいる。車を売る事は人を不幸にさせる仕事をしているのではないかと自責の念に駆られる。反面路上で自分が売った車に出会い、ホンを鳴らして笑顔で擦れ違う喜びはカーセールスの冥利でもある。今日は自分のユーザーの車に何台会えるか楽しみに、事故車の事は忘れて、商談中の山口さん宅へ愛車で向かった。

途中の閑散とした交差点に差し掛った時、信号が青なので直進したところ、突然左から人が飛び出して来た。ブレーキ踏んだが、間に合わず撥ねてしまった。すぐ車を止めて轢いた人の所に戻った。中年らしい男の人が血だらけで横たわっていた。息はあるようだが、

両足が潰れてしまっている。命は助かるかもしれないが、下半身不随になる事は容易に想像できた。一瞬私の脳裏に、家族の介護の日々が仄めいた。咄嗟に車まで引き返しUターンさせた。スピードを上げて、血に染まっている男の上半身を的確にタイヤで押し潰し、その場を走り抜けた。

私はその日のうちに緊急逮捕された。事故を目撃した交差点の角にあるガソリンスタンドの店員が、車のナンバーと詳細を通報したからである。私は取調べでも公判でも事件の事実は認めた。しかし殺人の動機については、両足不自由の本人と家族の一生続く不便を考えた慈悲殺人であると主張し、情状酌量による減刑を訴えた。だが判決は情状酌量のない無期懲役の刑が下った。

後日、被害者の奥さんが面会に来て、一億円の保険金が下りた事、一人娘を連れて再婚する予定との話があった。弁護士には上告を勧められたが、頑なに拒否した。